

人間が見えて来るために

2020年11月25日
大学宗教センター長
栗原 健

聖書：使徒言行録 第3章1節-10節

¹ペトロとヨハネが、午後三時の祈りの時に神殿に上って行った。²すると、生まれながら足の不自由な男が運ばれて来た。神殿の境内に入る人に施しを乞うため、毎日「美しい門」という神殿の門のそばに置いてもらっていたのである。³彼はペトロとヨハネが境内に入ろうとするのを見て、施しを乞うた。⁴ペトロはヨハネと一緒に彼をじっと見て、「わたしたちを見なさい」と言った。⁵その男が、何かもらえんと思って二人を見つめていると、⁶ペトロは言った。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」⁷そして、右手を取って彼を立ち上がらせた。すると、たちまち、その男は足やくるぶしがしっかりして、⁸躍り上がって立ち、歩きだした。そして、歩き回ったり躍ったりして神を賛美し、二人と一緒に境内に入って行った。⁹民衆は皆、彼が歩き回り、神を賛美しているのを見た。¹⁰彼らは、それが神殿の「美しい門」のそばに座って施しを乞うていた者だと気づき、その身に起こったことに我を忘れるほど驚いた。

今日の聖書箇所は、イエスの弟子たちの活躍を描いた使徒言行録の前半に出て来るエピソードです。ここでは、イエスの一番弟子ペトロとヨハネが足の不自由な男をいやしたという奇跡が記されています。

この場面が説教で取り上げられる時には、おおむね、ペトロの言葉にフォーカスが置かれることが多いのではないのでしょうか。「わたしには金や銀はないが、持っているものをあげよう」という一言です。「何は無くとも、私たちにはイエス・キリストという恵みがある。その恵みを、私たちは大胆に人と分かち合うことが出来るのだ」というこの言葉は、確かにキリスト者にとって大きな励ましとなるものですね。

しかし、今日はあえてそこではない部分、私たちが何気なく読み飛ばしてしまいそうな部分に注目してみたいと思います。どこかと言うと、神殿の門の前に足が不自由な男がおり、2人の使徒が彼に出会うというセッティング自体です。

この点に注目することによって、今日は、イエスを知ることはどのような変化を私たちの心にもたらすかということ、考えてみたいと思います。これは同時に、大学において学生に聖書を教えることにはどのような意味があるか、なぜそれが今の社会において重要なのかを考える1つの材料となります。その点も見て行きましょう。

まず初めに、この話の背景に注目します。舞台は、エルサレムの丘に立つ巨大な神殿です。その建築の豪華さと美しさは、「この神殿を見たことがない者は、真に美しい建物がどのようなものであるかを知らない」と外国でも噂されるほど、素晴らしいものであったと言われています。

この神殿には、いくつもの門がありました。このうち、どれが「美しい門」にあたるのかはハッキリしません。最近の研究によると、神殿の南側に位置する大きな階段付きの門のことではないかとも言われています。

いずれにしても、ここで私たちが心に留めなくてはいけないのは、この光景にあらわされている強烈なコントラストですね。かたや、神を礼拝する神殿のために、贅をこらし、技術を結集して造られた巨大な門があります。しかし、その前にいるのは誰でしょうか。「神のかたち」として生まれたにもかかわらず、足が悪いために社会から疎外され、施しがもらえるようにとモノのように置かれている男です。

神殿が美しくあれば美しくあるほど、その前に放置され、無視されている貧しい男とのコントラストが大きくなります。私たちも、この光景には「どこかおかしいのではないか」と感じるのではないのでしょうか。こうした光景が、現代の社会でも至るところにあります。門の前に物乞いの男が置かれていたという、この短い文1つにも、人間社会の歪みというものが無残なほどまとめられています。

さて、施しを乞うたこの男に対して、ペトロはヨハネと「彼をじっと見た」とあります。2人はこの物乞いに関心を持ち、目を留めたのです。

ここで考えたいことがあります。この2人を含めてイエスの弟子たちは、いつもこのように体の不自由な人々に対して関心を持ち、あたたかな目を注いでいたのでしょうか。福音書を読みますと、どうもそうではなかったようです。

弟子たちは、以前もイエスと共にエルサレムの神殿に来たことがありました。その時イエスは、神殿の境内にいた目の見えない人たちや足の不自由な人たちのことをいやしと、福音書は記しています(マタイによる福音書 21 章 14 節)。神殿であろうとガリラヤの野原であろうと、イエスは人々の苦しみを見逃さず、彼らもまた神に愛されている大切な存在であることを、癒しのわざをもって伝えていたのです。

しかし、弟子たちの関心は必ずしもそこには無かったようです。弟子たちは神殿を訪れた際、イエスに向かって、「先生、ご覧ください。なんとすばらしい石、なんとすばらしい建物でしょう」(マルコによる福音書 13 章 1 節)と言ったと福音書は伝えています。どうやら、彼らの関心はもっぱら神殿の壮麗さのほうばかりに向けられていたようです。そこにいた苦しむ人々に彼らが関心を示した様子は、福音書からはうかがえません。

実際、弟子たちは時として、障害がある人に対して無神経とも言える態度を取ることもありました。1つの例として、ヨハネによる福音書 9 章に記されている、目が見えない人をイエスがいやした話を思い出して下さい。

道を歩いていて、生まれつき目が不自由な人に出会った弟子たちは、イエスに向かって何と言ったのでしょうか。「この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人です

か。それとも、両親ですか」(9章2節)と尋ねています。

この質問は、当時の人々が障害ある人に対して抱いていた偏見から来たものです。古代のパレスチナでは、障害は誰かの罪によって起きるのだと見なされることがありました。弟子たちもその例外では無かったのです。

それにしても、目が見えない人が背負って来た苦しみを考えず、ただ神学的な議論のダシにする彼らの態度は、いかにも冷たい感じがします。仮にもイエスとあれだけ共にいたのですから、「もう少し違う反応があっても」という気がしてしまいますね。

そのような弟子たちの筆頭格であったペトロとヨハネですが、彼らはその後、イエスの十字架と復活を目の当たりにして、人間に注がれている神の愛の深さ、どこまでも人間を追いかけて行く神の情熱を知ります。そうした強烈な体験ののち、ふたたび彼らは神殿で、体が不自由な男に出会ったのでした。

この時は、彼らは違う反応を示しました。2人はこの男性の存在に気がつき、彼に目を注ぎます。そして、この物乞いが負って来た痛み、苦しみを受け止めて、あれこれ問うこともなく男をいやしたのです。

この2人の変化は、実に大切なことを示しているのではないのでしょうか。

神の愛を知り、自分がいかに神によって大切な存在とされているかを知った者は、同時に、他者のこともまた、大切な価値ある存在として見るようになります。彼らが抱えている痛みや悲しみにも気が付き、目を向けるようになるのです。社会のうわべの華やかさよりも、その下で苦しんでいる人々に目が行くようになります。他者を本当の意味で「神のかたち」として見る、人間を人間として見る事が出来るようになって行くのです。

今日の箇所ではペトロは、「右手を取って」男を立ち上がらせた(7節)とあります。右手は人を祝福する際に用いる手であり、友愛のしるし等の意味もありました。男の右手を握り、大切に支えるようにして立ち上がらせたというこの光景には、1人の人間ともう1人の人間との間でつながりが生まれたことが感じられます。

実はこの点にこそ、現代の日本において聖書を教える大きな意義があると言えると言えます。

現代の社会は、効率、生産性によって人の価値を決める冷たい世界になりつつあります。人のことを取り換えがきく機械の部品のように扱い、経済性によってランクを付けて行きます。

こうした中であって、多くの学生たちは、「自分の代わりなんて、いくらでもいるんだ」という、低い自己肯定感に悩まされています。市場原理で物事を見ることに慣れてしまったため、自分自身のことをも市場価値で考える、他者と比較して自分に値段をつけるような、そのような感じがします。このような状態では、「他者と共に生きて行く」という感覚もなかなか伸ばしにくいのです。

この現実の中でこそ、聖書を学ぶ意義は大きいのです。これは私が毎年、キリスト教学の授業を履修する1年生に言っていることなのですが、大学で教養としてキリスト教を学ぶ意義は何かというと、聖書を通じて世間一般とは違う見方、異なる価値観を学び、自分の人生、自分がいる社会の姿を見直す事が出来るようになるためだと言えます。

自分は大切な、価値ある存在として造られており、自分の人生には意味がある。と同時に、他の人もそのような大事な存在として造られており、互いに支え合って生きて行くよう、この社会は造られた。そうした目で自分自身と社会とを見つめ直したら、どのようなことが見えて来るだろうか。

これを学生たちには学んでほしいのです。

ですから、今日のペトロたちの話にあるように、聖書の言葉を学び、イエス・キリストに出会うことによって、学生たちには美しい神殿だけでなく、その前に横たわっている男にも気が付く視点を持ってほしいのです。「この光景は、おかしいじゃないか」「何とかすべきではないか」と気付く視点です。彼の苦しみを理解したいと望み、共に生きたいと願う、そのような感覚を養いたいのです。

大学での勉強はいろいろな種類がありますが、究極的にはどの勉強も、一般・専門にかかわらず、このように他者と共に生きて行くための学び、人間が見えて来るようになるための営みなのではないでしょうか。ペトロたちのエピソードから、私たちもこのことを心に刻みたいと思います。